

鎌倉市の成り立ちとゆかりの作家・文化人ら

明治22年 (1889)6月16日、東京と軍港のある横須賀を結ぶ目的で、官設鉄道大船駅 - 横須賀駅の横須賀線開通時に、鎌倉駅が開業する。そして、観光地としての性格が急激に濃くなっていった。また、東京から至近の別荘地として、皇族・華族や政財界の有力者などの一部が別荘を構えるようになり、これらを相手とした観光産業が発展していった。なお、この横須賀線建設工事のため「段 葛」は寸断された。

ちなみに江之島電気鉄道路線(現・江ノ島電鉄線)は、明治43年(1910)11月4日に鎌倉方面へ延伸し、大町駅(現在は廃駅)ー小町駅(鎌倉駅の前身にあたる、廃駅)間が開通し、これをもって全線開通する。

横須賀線鎌倉駅設置で東京からの便がよくなり、文学者らがこの頃から鎌倉へ訪れるようになる。加えて横須賀線の本数増や、複線化(大正13年)、東京-横須賀間の電化(大正14年)、北鎌倉駅の本駅開設(昭和5年)等もあって、京浜方面や横須賀軍港への通勤を可能にし、海軍軍人や、俗にいう別荘族などの定住化が促進され、東京近郊のベッドタウンとしての性格が強くなっていった。

大正12年 (1923)9月1日、関東大震災の発生。鎌倉にも大きな被害あったが、この大震災をきっかけとして、壊滅状態となった東京に比べれば遥かに被害の少なかった鎌倉と浦和(現在のさいたま市浦和区)に多くの文化人が居を移す時代が到来する。大正後期のこの時期を中心とした鎌倉と浦和の文化人を、それぞれに「鎌倉文士」・「浦和画家」と呼ぶようになる。

そして、昭和4年(1929)には鎌倉山分譲地の株主への土地分譲が開始された。これに伴う大船-江ノ島間の「自動車道」も完成し、翌年には大船-江ノ島間、鎌倉山-長谷間の「乗合自動車」が開業したという。

また、昭和11年(1936)1月には大船町に松竹の「大船撮影所」が竣工するなど鎌倉町と その周辺地域は、戸数や人口の増加のみならず、社会、文化両面で発展し、文学者や 知識人、映画人・芸術家等の居住環境が次第に整えられていった。

続いて、「三方を山に囲まれた鎌倉」の外側に位置する地域も市内に含まれるようになる。 それは、昭和14年(1939)11月3日に鎌倉町と腰越町が合併し、鎌倉市(第1次鎌倉市) が誕生した。その後、昭和23年(1948)1月1日に深沢村、同年6月1日に大船町を編入して、現在の鎌倉市となった

このような経緯から、大正時代から以降は多くの文学者らが鎌倉に滞在したり、暮らしたりするようになった。鎌倉は多くの文学者らに愛され、作品に登場し、鎌倉は文学都市として成熟するようになっていく。

ここでは、鎌倉にゆかりのある文学者らを紹介する。敬称は略しました。

鎌倉文士と文化人らた

目次 -----生没年表 鎌倉地名地図



鎌倉市の成り立ちとゆかりの作家・文化人ら
表2
01 小杉天外と雪ノ下 P6
02 黒田清輝と鎌倉と画家たち P10
03 夏目漱石と円覚寺塔頭帰源院P14
04 陸奥広吉と寿福寺······P18
05 井上剣花坊と建長寺 ······P20
06 西田幾多郎と稲村ヶ崎·····P23
07 鈴木大拙と松ヶ岡文庫·····P28
08 島崎藤村と円覚寺塔頭帰源院 ······P32
09 佐佐木信綱と東慶寺 ······P37
10 泉鏡花と妙長寺P40
11 高浜虚子と虚子庵跡
12 蒲原有明と二階堂·····P48
13 四賀光子・太田水穂と東慶寺P51
14 有島武郎と円覚寺塔頭松嶺院 ········· P54
15 与謝野晶子と鎌倉大仏P58
16 昇曙夢と稲村ヶ崎P62
17小山鼎浦と鼎浦庵P64
18 岩波茂雄と東慶寺 P66
19 生田長江と長谷寺·····P70
20 右阜生匡と「松の层動 P73

21 北大路魯山人と星岡窯	P77
22 田村俊子と東慶寺	P80
23 石橋湛山と鎌倉町会議員	P83
24 荻原井泉水と鎌倉	P86
25 武者小路実篤と光明寺	P89
26 木下利玄と報国寺	P93
27 萩原朔太郎と旅館「海月楼」	P96
28 吉井勇と鎌倉の恋	P101
29 葛西善蔵と宝珠院	P106
30 長与善郎と由比ガ浜	P109
31 高畠華宵と華宵御殿	P111
32 里見弴と西御門自邸	P116
33 岡本かの子と鎌倉駅「平野屋」	P121
34 村松梢風と西御門	P125
35 久保田万太郎と瑞泉寺	P128
36 山川菊栄と極楽寺	P132
37久米正雄と長谷寺	P135
38 広津和郎と鎌倉	P141
39 芥川龍之介と元八幡	P145
40 三枝博音と鎌倉アカデミア	P154
41 尾崎喜八と明月谷戸	P157

01 小杉天外と雪ノ下

小杉天外(1865~1952)は、明治19年(1886)に東京に出て、英吉利法律学校(現中央大学)と国民英学会に通う。こののちいったん帰郷して政治結社鳥 峯倶楽部にかかわった。

そして、はじめ政治家を志したが文学に転向する。同じ出羽国六郷出身の 小西正太郎、藤井新八郎と三人で自炊生活をしながら、小説の筆をとるように なった。のち洋行して画家となった小西正太郎は当時美校の生徒で、後年天 外の「魔風恋風」のモデルに扱われたことはあまりにも有名な話である。

天外は2歳年下の、異色ある文芸批評家・斎藤 緑 雨 (1868~1904) に師事した。天外の初作は、『酔骨録』(1891年) である。『當世志士伝』(1892年) などの政治小説を書き、明治28年 (1895) から『奇病』(1895年)・『改良若殿』 (1896年) などで諷刺作家として高い評価を得た。明治30年 (1897) には後

小杉天外『アサヒグラフ』1948年新年号

藤宙外とともに丁酉文社を組織し『新著月刊』発行に参加、小説執筆の他、川柳欄の選者を務めたが、この欄への尾崎紅葉 (1868~1903) の投稿が原因で紅葉と疎遠になった。

明治29年(1896)小杉天外は、胸を患い郷里で静養する。

明治30年 (1897) 天外は、 加賀藩士族の出、牛込で神 官をしていた森川正義の娘・幸 と結婚する。 天外は『はやり唄』の序文にこう記した。

「……自然は自然である、善でも無い、美でも無い、醜でも無い、ただ或時代の、或国の、或人が自然の一角を促へて、勝手に善悪美醜の名を付けるのだ。小説また想界の自然である、善悪美醜の執に対しても、叙す可し、或は叙す可からずと羈絆せらるる理窟はない、ただ読者をして、読者の官能が自然界の現象の感触するが如く、俗中の現象を明瞭に空想せしむれば、それで沢山なのだ……」。

明治35年 (1902)5月、天外は、小田原海岸に転居する。天外はこの時すでに36歳に達していた。胸の病気は克服したが、4年ほど前から新たに神経衰

弱の持病に苦しみ、しかも病気勝ちな妻と娘にも金がかかったので、 貧乏のどん底生活にあった。天外は、健康と生活のたて直しのため、 師の斎藤緑雨が居た小田原に彼を頼って移り住んだ。

明治35年(1902)、中篇小説「はやり唄」が出て、ゾライズムの第二作として注目された。

そんな中、尾崎紅葉の読売新 聞退社があった。紅葉は、帝国 大学法科大学在学中に読売に入 社し、文名が上がるにしたがい大



小杉天外が師事した斎藤緑雨『アサヒグラフ』1951年6月13日号

学を中退している。在社十数年におよび、この間「金色夜又」で自らの、また読売の声価を高めもした。幸田露伴(1867~1947)とともに明治期の文壇の重鎮となり、この時期は紅露時代と呼ばれた。紅葉と読売は不即不離の縁につながっていたはずであった。しかし明治32年紅葉が病いを得ると、約束の「金色夜又」の続篇を書かず、ぶらぶらしながら月給百円をとっているという不満から、明治35年8月、ついに読売は紅葉を追い出してしまったのである。

紅葉を敵にすることは、硯友社によって主流を占められていた文壇全体へ喧嘩を売ることに等しかった。まさにそのとおり、読売は泉鏡花(1873~1939)に執筆を断られ、広津柳浪や川上眉山にも背を向けられた。硯友社系の文士への手がかりを失った読売は、その秋、硯友社以外のもっとも有力な作家として小杉天外に白羽の矢をたてたのである。

明治36年 (1903)2月、読売新聞に連載した小杉天外の青春小説『魔風恋 「魔風恋」が連載190回の人気となって、このために新聞の再版を出すといった珍事 さえ起こったという。当時あこがれの的であった帝国大学生と女学生の恋愛を 扱ったこの小説は、いやがうえにも人気が湧いたのであった。新聞は刷り増しを して売りに売った。読売は『金色夜又』を失ってから『魔風恋風』によって立直っ たといわれた。そして、流行歌にもうたわれ、明治38年(1905)には劇界新旧 両派が競演の形でこれを劇化上演した。歌舞伎は歌右衛門、羽左衛門、幸 四郎、新派は伊井蓉峰、河合武雄、喜多村緑郎が主演した。

以降小杉天外は、硯友社以後の新写実派の代表となった。一方では激しい非難もあり「淫蕩文学」という言葉も作られるほどであった。しかし、これにより、天外は流行作家となり、遺伝問題を扱う『コブシ』(1906~1908年)・実業家の内情を描く『長者星』(1908~1909年)・『伊豆乃頼朝』(1911~1912年) などを発表しゾライズムの深化をみせたが、明治40年(1907)以降、大衆作家としての天外は文壇の中心から遠ざかった。

明治43年(1910)に天外は報知新聞に移り、大正3年までいて同紙に「伊豆 乃頼朝」などを書いた。こうして、大正、昭和期にも少なからずの作品を発表 しているが、新文学の抬頭の波に洗い流されて、ついに昔日の境地を彷彿さ せる作品を生み出せずに終わる。

大正12年(1923)9月1日、天外は、葉山に避暑中、関東大震災に遭う。

昭和3年(1928)、小杉天外は逗子に移り、桜山の借家に住む。

昭和7年(1932)、天外は、病気がちになる。

昭和10年 (1935)7月3日、小杉天外は、鎌倉の雪ノ下四一番地字沸谷に 家を新築して移転する。以後同27年の死まで鎌倉に住む。

昭和16年 (1941)11月15日、小杉天外のため、鎌倉ペンクラブの主催で 喜寿の会が催される。

昭和22年(1947)『くだん草紙』百三十枚を、大佛次郎経営の雑誌『苦楽』 に頼まれて書く。戦後初めての執筆である。

昭和23年3月、天外は日本芸術院会員となる。同年9月、宮中にて御陪食 を仰せつかる。ロダンの芸術のお話もした。

昭和26年 (1951)9月15日、老人の日記念にとて、『姉日記』第一回を清書。 紙数四枚。米寿の記念作とて大努力をした物なり。

昭和27年(1952)、『馬鹿になる近道』と『紅夢楼』を書く。

小杉天外は、同年9月1日鎌倉市雪ノ下の自宅に没した。享年88。鎌倉の 建長寺に葬られた。晩年親交のあった大佛次郎が墓誌銘を撰書した。

仙北郡六郷町(秋田県仙北郡美郷町六郷字東高方町123)の善證寺。

中央に小杉家累世の墓、右手に天外の両親の墓、そして左手に故人とゆかりの深かった板谷大曲市長夫人・板谷かつ子が、鎌倉から分骨して埋葬した、 天外と、終生その内助の功をうたわれた幸夫人の墓とがある。両親の墓は大正10年秋に天外が建立したもので、裏には天外の撰になる墓誌が刻まれている。

02 黒田清輝と鎌倉と画家たち

黒田清輝(1866~1924)は、近代日本の美術に大きな足跡を残した画家であり、 教育者であり、美術行政家であった。

明治17年(1884)2月2日、黒田清輝17歳は、横浜港から出航、法律研究 のためフランスに向かう。初め法律を志したが、ラファエル・コランに師事して絵 を学ぶ。明治26年(1893)夏に9年におよぶフランス留学から帰国した。そし て黒田は、明治33年(1900)5月25日、再び、横浜港からフランス船サラジー 号で出航、美術に関する制度取り調べなどのため一年間のフランス留学に向か う。翌年5月中旬に帰国する。

大正3年(1914)2月初め、乱橋材木座に別荘 「奏笙軒」(父から贈られた雅 号)を新築して構え、海景あるいは雲の連作など自然を主題にした作品を多く 手掛けている。400坪の敷地に3階建てのアトリエだったという。 鎌倉市材木座 1-10-24の銭湯 「清水湯」が清輝宅跡という。 久米桂一郎(1866~1934)など清 輝の友人・知人の画家たちも訪れている。

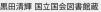
近代洋画を確立し、東京美術学校の教授、白馬会の創設の黒田清輝が、 夏に啓運寺の本堂(現在の本堂は昭和8年(1933)の建て替え)で、創作してい たという。このアトリエでは、《鎌倉にて》、《雲》を製作した。『新編鎌倉志』によ ると啓運寺はもと妙法寺といい、大町の妙法寺をもと啓運寺と言ったと書かれ ている。また長勝寺も啓運寺といったという。

明治45年(1912)3月3日、黒田清輝は鎌倉に行き、家屋代三百五十円を 支払う。7日、借入地の工事着工を見る。9日、帰京する。

大正2年(1913)8月6日、黒田清輝は鎌倉に行き、別荘に滞在、避暑する。 別荘建築を計画し建築図案を練り、見積書をとる。9月25日、帰京する。同年 11月27日、鎌倉に行き、別荘新築工事の進捗状況を見、割烹旅館「小町園 | で夕食をとり、帰京する。12月7日にも訪れ、8日、9日と建築現場で指示する。

同年12月23日、鎌倉に行き、翌日、 建築現場を見て帰京する。28日に も行く。大正3年(1914)1月1日、 前日の大晦日の晩に鎌倉に行き、 乱橋の別荘で新年を迎える。同月 7日、鎌倉から鹿児島旅行に立つ。 同年2月18日、鎌倉に行き、2月初 めに落成した新築の別荘に入る。3 月10日、帰京する。同年9月16日、 父より別荘に「奏笙軒」の雅号を贈 られる。それからもたびたび鎌倉 に足を運ぶ。

黒田清輝は大正13年7月15日 死去、58歳。東京都港区西麻布2 丁目21の長谷寺(永平寺別院)に眠る。





大正6年 (1917)2月22日、**岸田 劉 生** (1891~1929) は、藤沢の鵠沼に滞在 して絵を画く。岸田は、結核を疑われ、友人武者小路実篤の住んでいた神奈 川県藤沢町鵠沼の貸別荘に、東京市荏原郡駒沢村新町から転地療養の目的 で居住していた。

前々日、鵠沼に来てくれた長与夫婦への御礼として、大正8年8月7日岸田劉 生は、鎌倉に住む長与善郎 (1888~1961) を訪ねる。以来往来しきりであった。 この鵠沼時代がいわば岸田劉生の最盛期であった。

大正12年(1923)9月1日、関東大震災で自宅が半壊し、10月3日京都に転 居した。大正15年(1926)2月末には岸田劉生は、京都市南禅寺草川町から 鎌倉の長谷一四二二番地に移り住み、終生当地で暮らした。 明治4年12月20 日、山口徳山で客死、38歳。多磨霊園に眠る。

禅の研究家であった小倉鉄樹と、年の差30歳というこの結婚は東京日々新聞に号外で扱われるなど話題となったが、この結婚が、遊亀にかけがえのない心豊かな生活をもたらし、絵も自由に解き放たれていったという。小倉遊亀は、昭和55年(1980)女性としては三人目となる文化勲章を受章した。そして、平成7年(1995)、鎌倉市名誉市民となった(女性初)。平成2年(1990)に日本美術院理事長を、平成8年(1996)日本美術院名誉理事長に就任した。

代表作には「浴女」、「受洗を謳う」がある。平成12年(2000)7月23日、東京都中央区の聖路加国際病院で死去した。享年105歳。鎌倉市の浄智寺に眠る。墓は五輪塔で、右側に墓誌が建つ。

前田青邨(1885~1977)は、昭和5年(1930)「洞窟の頼朝」で第1回朝日文化 賞受賞した。昭和14年(1939)6月、鶴見から静かな地を求め北鎌倉・山ノ内 へ移り住む。昭和30年(1955)文化勲章受章、文化功労者。翌年、日本美 術家連盟会長に就任。昭和48年(1973)高松塚古墳壁画模写事業総監修者 となる。

昭和52年10月27日、東京文京区本郷の順天堂医大附属病院で死去、92歳。墓は、神奈川県横浜市の總持寺と鎌倉市の東慶寺に分骨されている。 共に墓は五輪塔で造られて、東慶寺には「前田青邨 荻江露友夫妻之墓」が建てられている。東慶寺の墓地の一角にある層塔は、前田青邨の筆塚である。

青邨門下では、歴史画の第一人者として活躍した**守屋多々志** (1912~2003) が昭和15年(1940)同じく山ノ内に居を構え、終生暮らした。

昭和35年 (1960) 完成の、円覚寺仏殿の天井画は、前田青邨監修、守屋 多々志揮毫の《白龍の図》である。昭和47年(1972)文化庁より高松塚古墳壁 画模写を委嘱され、東壁の女性群像を担当する。(総監督は前田青邨)。昭和 51年 (1976) 飛鳥保存財団の委嘱により、高松塚壁画館に展示するための壁 画模写(20面)に総監督として従事、約2年を要して完成させる。

守屋は、平成13年(2001)11月、文化勲章を受章。同年、大垣市守屋多々志美術館が開館。平成15年(2003)、鎌倉生涯学習センターギャラリーにおいて「守屋多々志が描く鎌倉の風致」が開催される。同年12月22日、聖路加国際病院で死去。享年91。

青邨門下の**太田 聴 雨** (1896~1958) は、東京芸術大学助教授に就任した昭和26年 (1951) に、伊豆下田から同地 (鎌倉市山ノ内878) に移り住む。花鳥や歴史主題、現代風俗、肖像画と幅広い主題に取り組み、端正で洗練された画風を築く。昭和33年 (1958) 東京芸術大学美術学部日本画科教授に昇任したばかりの3月2日、上野桜木町浜野病院で死去。享年62。

日本画家・**鏑木清方** (1878~1972) は、戦後の昭和21年 (1946) に疎開先の静岡御殿場から鎌倉の材木座へ移り住んだ。そして昭和29年 (1954) 鎌倉雪ノ下に転居。同年第13回文化勲章受章。清方は76歳で居を構え、同47年 (1972)3月2日に95歳で亡くなるまでをこの地で過ごした。谷中霊園に眠る。「内に居れば閑靜で、戸外へ出れば賑やかなところ」を好んだ清方にとり、雪ノ下はまさに理想の地であった。その旧居跡に建てられたのが平成10年 (1998)4月開館の「鎌倉市鏑木清方記念美術館」である。

清方門下の**伊東深水**(1898~1972)も昭和24年(1949)に疎開先の信州小諸から鎌倉・山ノ内へ居を移し、月白山荘と名付けた画室で制作活動を行った。北鎌倉駅から約10分の谷戸の中、西瓜ヶ谷と呼ばれる場所という。深水は、昭和26年(1951)頃、材木座の清方を訪れ、随筆家の一面をもつ師の姿を写し作品に残している。朝丘雪路の父である深水は、昭和47年5月8日死去、74歳。品川区上大崎の降景院に眠る。

やがて昭和47年(1972)に、前田青邨門下の**平山郁夫**(1930~2009)が二階堂に画室を構え、終生暮らした。平山が薬師寺に奉納した大壁画を創作したアトリエである。文化勲章受章者、東京芸術大学長も務めた平山郁夫は、平成21年12月2日東京の病院で死去、79歳。岡山県尾道市瀬戸田町の法然寺に眠る。

■主な参考文献(順不同)

山

- ○「現代鎌倉文士」 鹿児島達雄・著 (かまくら春秋社 1984年)
- 〇「文壇資料鎌倉·逗子」巌谷大四·著 (講談社 1980年)
- ○「特集・鎌倉文庫 別冊かまくら春秋」(かまくら春秋社 1985年)
- ○「文学都市かまくら100人 図録」鎌倉文学館・編 (鎌倉文学館 2005年)
- 〇「神奈川近代文学年表 文学者たちの神奈川〈明治編/大正・昭和初期編〉」神奈川文学振興会・編 (県立神奈川近代文学館 1995年)
- 〇「神奈川県近代文学資料」第1?第6集·第7?第11集(2冊) (神奈川県高等学校教科研究会国語部会 1983年?1998年)
- ○「鎌倉 もうひとつの貌」染谷孝哉・著 (蒼海出版 1980年)
- ○「鎌倉近代史資料その1 人物編(1)」(鎌倉市中央図書館 1979年)
- ○「鎌倉発見?古都を愛した文人たちー」金子晋・著(読売新聞社 1973年)
- ○「鎌倉の文学 小事典?文学を歩く?」(伊藤玄二郎・編 かまくら春秋社 2005年)
- 〇「鎌倉文学散歩」安宅夏夫·著 (保育社 1993年)
- ○「作家の臨終・墓碑事典」岩井寛・編(東京堂出版 1997年)
- 〇「文学者掃苔録図書館」大塚英良·著(原書房 2015年)
- ○『大拙と幾多郎』森清・著(岩波現代文庫 2011年)
- 〇「日本文学大年表?上代?平成6年 増補版」市古貞次·編(桜楓社 1995年)
- 〇「日本近代文学大事典」日本近代文学館·編(講談社 1992年)
- 〇「増補改訂·新潮日本文学辞典」(新潮社 1988年)
- 〇「現代日本文学大辞典」(明治書院 1994年)
- ○「湘南鎌倉吟行案内」草間時彦・編(俳人協会 1993年)
- 〇「地名俳句歲時記2 関東」金子兜太·能村登四郎·野澤節子編/監修 山本健吉(中央公論社 1986年)
- ○「新選 俳枕2 関東」尾形仂 加藤楸邨監修 朝日新聞社·編(朝日新聞社 1987年)
- ○「関東ふるさと大歳時記」角川文化振興財団・著(角川書店 1991年)

編集にあたり、上記主な参考図書・関連図書や国立国会図書館デジタルコレクション、神奈川県や鎌倉市、鎌倉観光協会などの公式WEB、県立神奈川近代文学館・鎌倉文学館はじめ全国の文学館・記念館、大学や団体等のWEBも大いに活用させていただきました。資料の選択、異説などあると思われますが、弊社の総合的勘案で編集し、掲載いたしました。ご了承のほどお願い申し上げます。

本書掲載の地図は、国土地理院発行の地形図をもとに作成いたしました。© ユニプラン 2022

鎌倉文士と文化人ら 上巻

〜鎌倉にこだわり、九十人(上巻五十人・下巻四十人余)の エピソード・住まい・恋・結婚・墓標などを記しました〜

第1版第1刷 定価 1100円(本体1000円+税10%)

発行日 2022年2月15日

編集スタッフ ユニプラン編集部

デザイン 岩崎宏

発行人 橋本良郎

発行所/株式会社ユニプラン

〒601-8213 京都府京都市南区久世中久世町1-76

TEL. 075-934-0003

FAX. 075-934-9990

振替口座 / 01030-3-23387

印刷所/株式会社プリントパック

ISBN978-4-89704-542-9 C0095